2025 年 6 月 16 日　NO.675

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会　広報部
〒460-0018　名古屋市中区門前町1番23号
東海教区教務所内
TEL 052-321-0028　FAX 052-332-4097
e-mail　info@tokai-hongwanji.net

東海教区額田組　活動報告

額田組は愛知県三河地方の 29 カ寺で構成され、主に本願寺三河別院を会所として、活動しています。徳川発祥の地であり、近年は自動車産業が盛んです。

組内活動は活発で、連研は 19 期を終えたところです。

毎年「仏教講習会」を 2 日間実施し、午前は主に僧侶研修、物故者追悼法要を挟んで、午後は門信徒の法話会を実施しています。昨年は 1 日目に親鸞聖人 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要を三河別院と合同で修行・実施しました。また、毎年声明講習会を 2 日間開催し、声明の研鑽をしています。仏壮は、毎年念仏奉仕団を組織し、今年は記念の 30 回目となっています。

総代会や少年部門は「子どもと一緒に手を合わそう」をスローガンに、キャンプや別院会場で念珠作りや消防署の協力を得て、起震体験等を実施しています。

寺青も雅楽修練を積み重ね、本年は新たに餅つき大会を企画し、寺院女性も災害時の食事作り等を企画しています。

さらに、毎年御正忌報恩講の団体参拝を実施しており、総代会や門徒推進員の協力を得て、僧侶と門信徒が交流し、全員聞法・全員伝道により、実践運動に繋げていければと思っています。

Contents

額田組活動報告	P1
こころばなし	P2
中央委員会報告	P3
特集	P4.5
宗会報告	P6
部会紹介	P7
声/書棚/編集後記	P8

慶讃法要の様子

『教えとなって届く光の仏』

小笠原　元（名古屋組吹上寺）

恥ずかしながら私は、正信偈を無本でとなえるのが苦手でした。そのため得度の際は苦労したことをおぼえています。

特に**「普放無量無辺光　無礙無対光炎王　清浄歓喜智慧光　不断難思無称光　超日月光照塵刹　一切群生蒙光照」**と、阿弥陀如来という仏さまの十二光についての語られる部分をとばしてよんでしまうことが多く、得度の前に何度も繰り返しよんで忘れないようにしていました。

今ふりかえってみると、十二光のご文を私がよく間違っていたのは、前後の意味をわかっていなかったからだと思うのです。

十二光のご文の前には

「法蔵菩薩因位時　在世自在王仏所　～五劫思惟之摂受　重誓名声聞十方」と、阿弥陀さまが、法蔵と名のられていた頃に、世自在王仏のみもとで五劫という果てしなく長い時間集中してお考えになられて、本願を建てられ、「かならず救うまかせよ」の南無阿弥陀仏の名号を十方に聞かせ、人々を救っていくとお誓いになられたんだ。と語られています。

その後に続く十二光のご文というのは、大経がもとになっています。

阿弥陀さまの光の徳を、お釈迦さまが十二通りの異名をもって讃嘆されるご文です。私はそこでこう思ったのです。

「正信偈の冒頭では阿弥陀さまの名号、南無阿弥陀仏について語られているのに、どうしてここで急に光の徳のことをいうんだろう。」と。南無阿弥陀仏と光を無関係な別物ととらえていました。それは残念ながら浄土真宗の教えにおいて間違いといえるでしょう。

十二光についての解説書で『弥陀如来名号徳』という親鸞聖人の著作もあります。題名からもうかがえますが、親鸞さまはこの著作の文末に「南無不可思議光仏」とお書きになり、その横に御左訓として**「南無は智慧なり。不可思議はりなり。光仏はきやうなりと知るべし」**（『註釈版聖典 732 頁』）と書かれています。南無とは智慧である、不可思議とは理である。というのもすごいお言葉ですが、注目したいのは「光仏はきやうなり」というお言葉です。阿弥陀さまというのは「教え」となって、言葉となって私たちに届くものなんだ。といいます。私たちが聞かせていただき、心に届き、声となってあらわれるもの、それは一言であらわすなら「南無阿弥陀仏」の名号なのです。

ですから、正信偈や大経にある十二光というのは、私が勘違いしていたような南無阿弥陀仏と無関係な電灯のライトのような光ではなくて、むしろ、一言でいえば南無阿弥陀仏であるところを、12 のはたらきに沿ってひらいていった豊かな南無阿弥陀仏の教えの世界が、正信偈の**「普放無量無辺光　無礙無対光炎王　清浄歓喜智慧光　不断難思無称光　超日月光照塵刹　一切群生蒙光照」**のご文であったんだとわかります。

「御同朋の社会をめざす運動」中央委員会 報告

「御同朋の社会をめざす運動」中央委員 松野尾浩慈

このたび、中央委員会に出席してまいりました。現場で交わされたさまざまな意見や取り組みの報告を、少しでもわかりやすくお伝えできればと思います。

●重点プロジェクトの推進状況

宗門として取り組む重点プロジェクト「子どもたちを育むために」の推進体制が報告されました。各教区においてリーダー・サブリーダーの研修が行われ、組単位での実践の充実が図られています。年度内には中央主催の研修協議会も開催され、情報の共有と理解の深化が進められています。

●「子どもたちの笑顔のために募金」活動

本山御正忌期間中の募金ブース設置や、全国からの募金による支援が報告されました。支援先として、子ども食堂・学習支援団体・ネパールの学校建替えなどが紹介されました。

●宗務部門の組織改革について

2025 年 4 月より中央宗務機関の再編が行われます。11 部署 27 担当体制から、8 部署 1 課体制へと再編成され、部門横断的な連携と効率化を図ります。これにより、実践運動の更なる推進体制が整えられます。

●ジェンダー平等の推進

昨年設置された「ジェンダー平等推進委員会」より答申が提出され、宗門内での具体的取り組みが始まります。中間報告は『宗報』にて公表されており、今後も推進体制の強化が図られます。

●戦後 80 年に向けた平和に関する論点整理

戦後 80 年を節目に、「平和に関する論点整理」が取りまとめられました。今後は平和貢献に関する学びと実践が計画されています。

●個人情報保護に関する事案報告

長野教区寺院における過去帳開示の問題が報告され、再発防止と啓発強化の必要性が改めて確認されました。教区・組における人権研修の重要性が強調されました。

●戦後 80 年に関する宗派声明の方向性

高岡教区より「戦後 80 年にあたり、非戦平和とヤスクニ問題に関する宗派声明を出すこと」を求める意見具申が提出されました。中央委員会ではこの趣旨に賛同の声が多くあがり、「宗派として声明を出す方向で共通理解を持つ」ことが確認されました。今後の宗門内の議論や発信が期待されます。

●情報共有と意見具申の公開性についての議論

高岡教区より「中央委員会の内容を『宗報』に掲載してほしい」との意見具申があり、透明性や運動の活性化につながるとして、多くの賛同が寄せられました。

以上、中央委員会での議論を通じて、実践運動の今後の展開に向けた多くの気づきと課題が示されました。とりわけ、過去帳開示に関する問題は、ここ十数年の間に繰り返されており、十分に反省が活かされていない現状があります。教区内の各寺院におかれましても、個人情報の取り扱いについて今一度襟を正していただきますよう、お願い申しあげます。今後ともご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

~特集~

日々の活動や研修会に活かす

お坊さんの社会科見学

～愛知県岡崎市の伝統的な「和ろうそく」づくりから学ぶ～

岡崎市は、江戸時代、東海道の要所として物も人も情報も集まる地でした。そのような歴史を背景として、さまざまな伝統的産業が脈々と続けられています。また岡崎市は徳川家康が浄土宗を加護したことで寺院が増えたと言われ、京都に並ぶ寺院の多い地域として、仏事に欠かせない「和ろうそく」の産地となりました。今回は伝統的な「和ろうそく」づくりをレポートします。

100%植物由来　和ろうそくの特性とは

和ろうそくの原料となるロウは、ウルシ科のハゼの実から取れる「櫨蝋（はぜろう）」を使用します（和ろうそくには、米ぬか油から作る「ぬかろう」などもあります）。ハゼは琉球から九州に渡り品種改良された日本特有の植物で現在では九州地方で採取されますが年々その数は少なくなっています。100%植物性、天然素材を使用した和ろうそくの特性は、すすが少ない、ロウがこぼれ落ちない、風に強い、消えにくい、完全燃焼することにあります。

原材料「櫨（ハゼ）の実」

和ろうそくの原材料となる櫨の実は、７mからなる高木にはしごをかけて「手作業で」実を摘み取る必要があります。また櫨はうるし科の植物のためかぶれやすく、生産者は大変な苦労の元、蝋を制作してみえるそうです。

製造過程　思いをこめてロウをかける

和紙に「灯芯草」を巻き付けたものを芯としています。この芯を串に刺してロウを塗っていきます。溶かしたロウを手でかけていきますが、ロウの温度は45～50℃、乾かしては、またかけるという作業を繰り返し、ろうそくは少しずつ太くなっていきます。大きいロウソクは100回以上ロウをかけていきます。

写真上はロウをかけていく「ふね」とよばれる作業場です。形がいびつだときれいに燃えないので、均等になるようロウをかけていきます。熟練の技術が必要とされます。
その右は「芯出し」という作業です。鉛筆削り器のような道具で芯を出します。
最後に「しり切り」をして形を整え完成です。

灯りとともに　ロウソクの灯りをあらためて見直す。

和ろうそくの灯りには、黄色がかっているため温かみがある、燃えるときに揺らぎがある、最後まで燃え尽きるなどの特色があります。今回の取材で部屋を暗くしてロウソクを灯す体験をさせてもらいました。

ロウソクをつかった企画を催されるお寺も多いと思います。和ロウソクの揺らぎは、以前話題となった１/ｆ（エフぶんのいち）の揺らぎであるといいます。ロウソクの灯りには心を落ち着かせる作用があるのでしょう。

同じようでも少しずつ表情を変えながらロウソクは燃えていきます。今回の体験で燃え尽きるまで炎を見つめることをしました。いままで燃え尽きる瞬間までロウソクを見つめることはありませんでしたが、火がなくなってもなお、余韻を残しながらロウソクは消えていきました。そこには私たちのいのちの輝きを見たようにも感じました。自坊でもロウソクの灯りを使った企画をしてみたいなと思いました。

清水寺との出会い　SDG’sを考える

清水寺では「持続可能な社会をめざすため」に自然由来にこだわった、これから1000年残したいmarketを開催しており磯部ろうそく店も参加してみえました。

清水寺とお話をしていく中で、お寺で使っているロウソクを石油でできた洋ロウソクから自然由来の和ろうそくへ少しでも変えていきたいという相談がありました。そこで参詣者が献上するロウソクや千日詣りなどお勤めのロウソクに、和ろうそくの使用を勧められました。

結果として、以前はトラックいっぱいになるくらい大量であった祈願用などのロウソクゴミが、（最後まで燃え尽きる和ろうそくの特性から）バケツ一杯ほどに収まるくらいまでに劇的に減ったということです。

寺院も「持続可能な社会」とは無関係ではいられません。和ロウソクを手掛かりとしてこの問題を考えることは有意義だと言えるでしょう。

今回の取材にご協力いただいたお店

磯部ろうそく店　（愛知県岡崎市八幡町１-27）

今回取材に協力いただいた「磯部ろうそく店」は文献をさかのぼると、300年ほど続く現存する伝統的ロウソク店では全国で最も古くから営業をしているお店だそうです。

磯部ろうそく店では製造過程・歴史などのお話を伺うだけでなく、ロウソクへの絵付け体験や聞香体験などさまざまな体験も実施しています。各種研修会などにもいかがでしょうか。店舗ホームページには詳しい情報が掲載されています。こちらもご覧ください。

磯部ろうそく店HP

～取材を終えて～

今回の取材で印象的なお話に「変わらないために変えていくんです」という言葉がありました。ロウソクづくりは600年以上続く伝統的な産業ですが、伝統を守るためだからこそ変えるべきところは変える必要があるとおっしゃいます。
お店ではSNSなどを利用した情報発信も積極的に行ってみえます。清水寺も「持続可能な社会」「ゴミ問題」を考えた時に何かできないかと行動をした結果でした。私たちにも絶対に守るべき部分と時代の変化に合わせて変えなくてはいけない部分があると思います。
有意義な取材となりました。

宗会報告

松野尾慈音(額田組明願寺前住職)

今回の宗会報告のテーマは、変化の予感です。宗会の最終日に、新しい領解文を今後は用いないことと池田総長の辞任が決まり、翌日の選挙で園城総長が選ばれました。この選挙の性格は、言わば与野党の交替を意味するものです。今までの総局が推進してきた主立った政策は園城総長のもとで見直しが進められ、新領解文を始め賦課金、北境内地、ビハーラの事業展開などは今後の進展が見込めません。

これらの施策は元々10 年前の総合振興計画で三つの目標が設定されたことに基づいています。その概略は

〇仏教の精神に基づく社会への貢献ービハーラの事業展開

〇自他共に心豊かに生きる生活の実践ー新しい領解文、築地本願寺の展開

〇宗門の基盤づくりー賦課金、北境内地、ＤＸ化

として整理できます。今回の見直しは個別の政策に止まらず、本年３月に終了した総合振興計画の三つの目標の見直しに直結するでしょう。

私見ですがこの計画は将来の教団ビジョンを公共の福祉に寄与する教団と定め、築地本願寺で展開された「お寺に縁のない人」への伝道教化事業の成功をモデルとして、「家の宗教」が衰退していく状況に対応したものです。築地本願寺では「伝える」から「伝わる」伝道を提唱して業務の見直しや新事業の展開、イベントの開催など、「お寺に縁のない人」への教化活動が現在も進行中です。

しかしこの都市化した環境での成功モデルを全国で展開するのには、全国各地の諸条件が違いすぎたと思います。今日の現況は、家の宗教離れがコロナによって加速し、墓じまい、仏壇整理が加速しています。この状況を止める力は私たちの教団にはありませんから、状況の変化に応じて新たな対応を模索することが求められます。新しい総局の今後の施策は、都市の「お寺に縁のない人」への伝道教化を優先するものではなく、一般の寺院でも取り組めるものになると思います。

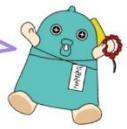
もう一つ、大きな懸案として、大谷本廟の改修計画があります。これは第一無量寿堂の建設当時にはなかった耐震基準に、今後どう対処するかという問題です。現在第一無量寿堂には約一〇〇万体の遺骨があり、所有者不明の遺骨も多数に上ると言われています。まず所有者確認をして外部に保管するのに四年、耐震補強工事完了後に改めて収納するのに三年、その費用が、概算ですが百四十七億円と言われています。これは第一無量寿堂の使用者に負担を掛けないことで検討されているようですが、建築当初には想定のなかった耐震基準への経費ですから、受益者負担が生ずるのもやむを得ないでしょう。更に現在の利用者が、応分の受益者負担を前提として、今後も第一無量寿堂を利用し続けるかの見通しも必要です。

そしてその建設費用に充てることを含めて、四十四億円で第三無量寿堂の建設が同時進行しています。いずれの計画も宗派ではなくご本山の立案ですが、多額の予算が投じられるものですし第一無量寿堂には教区の多くの寺院が納骨しておられるでしょうから、今後の推移を注視していきたいと思います。

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会ってどんな組織？

おしえて
第3弾

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会の中の団体にお話をうかがっているので**引き続き、順不同で掲載していくね。**



門徒推進員連絡協議会

門徒推進員
委員長
今西康隆

●具体的な活動・予定●

1. 総会・研修会：
　　R6.6.5 新役員の任命、本願寺派布教使筑田師法話
2. 門徒推進員推進員のつどい：昨年真宗高田派専修寺、
　　本年三河別院・本證寺・八丁味噌
3. 連研のための研究会：
　　R6.3.7「戦争を繰り返さない為に念仏者として何をするか」

●活動の課題●

1. 各組の連絡協議会からの脱会や、会員の減少に歯止めが困難である。
2. 各組で連研を受講しても中央教習に参加しない方が多数である。
3. 定年退職者で地域貢献に興味を持っておられる方を、寺院活動にお誘いする努力を粘り強く続ける事が大切である。

●読者へのメッセージ●

今年は太平洋戦争の終戦80年に当たります。過去の戦争に学び、平和への願いを新たにしたいと思います。

矯正教化連盟

支部代表者
小野正信

●具体的な活動・予定●

教区内に位置する刑務所や拘置所に入所している収容者に対し、浄土真宗の教義に基づいて心の悩みに向き合い、安らぎと前向きな生き方をともに探る宗教教誨を行っている

組実践運動リーダー委員会

委員長
小林俊史

●具体的な活動・予定●

組重点プロジェクト推進計画に基づき、組における重点プロジェクトの促進を図る。活動現状の収集整理及び現状把握を行い、組委員会に対する組重点プロジェクトの現状報告をする。

仏教壮年会連盟

●具体的な活動・予定●

・総会終了後に研修会の実施
　（テーマ：今後の仏壮活動について）
・ブロック研修会（昨年は真宗高田派願隆寺の坊守である石濱　栞さんを講師としてお招きし、お香と仏教の関係、お香の使い方などを学び、梅山英暁さんより法話を聞かせていただきました）

●活動の課題●

各単位会での会員数の高齢化・減少が避けられず、できるだけ多くの方にご縁を頂けるよう案内、勧誘していきたい。

理事長
種村美樹

~声（読者のページ）~

『話しかければ道開く』

2025 年 4 月 13 日　大雨の中大阪関西万博は幕を開けた。まだ行けてない私が得た情報では、とにかくたくさん歩くということと混雑しているということだ。大阪出身の私としては是非行きたいところだが、歩くのは良いとして混雑の中に身を置くことを考えると尻込みしてしまう。

先日も大阪の空中庭園に行ったときのこと、子ども達と展望台に登ろうとしたら、エレベーターにのる長蛇の列が…。私達家族は一瞬にしてあきらめる空気に包みこまれたが、一緒にいた私の母は粘り強く、そして賢かった。

入り口が沢山あったので、いろんな所から入れないか確認した後、窓口のお姉さんとあれやこれやと話して、登る時に景色が見れなくて良いならオフィス用のエレベーターで登れることを突き止めた。おかげで並ぶことなく無事展望台に登ることができたのである。

そういや、万博の特集をしていた情報番組で、親世代の女性が混雑攻略法の一つとして、「とにかくお客さん同士でコミュニケーションをとって、生の情報を得ること」と話していた。帰りのエレベーターの中、妙に納得。万博行くなら母と行こう。

~お坊さんの書棚~

『コロナ禍と出会い直す　不要不急の人類学ノート』著 磯野真穂　出版 柏書房

本書は朝日新聞デジタル「Re:Ron」に 2023 年 4 月から 2024 年 1 月まで掲載された連載が書籍化されたものである。著者が専門とする文化人類学・医療人類学の観点からコロナ下の日本で行われてきた感染対策を見つめ直し、「和をもって極端となす」日本社会の思考の癖をあらわにし、未来に向けた提言が書かれている。

新型コロナに対しての様々な感染対策について、それぞれに思うところがあっただろう。個人としてマスクをする・しない、旅行に行く・行かないという判断もあれば、お寺を預かる身としてご法座をどうするか、開くならどの程度の感染対策を取るのかということで多くの人が悩んだに違いない。

ただ、新型コロナが 5 類になって 2 年あまりが経過し、あの頃感じたことが遠くになりつつある。あの時の判断でよかったのか、何かを見逃していなかったかの振り返るときに本書は良きガイドラインとなるであろう。

間違いなく訪れる次の感染症のためだけでなく、本書で指摘される癖を持ち合わせているがゆえに同種の問題を引き起こし続けている私たちが読むべき一冊である。

~編集後記~

多くの方が経験されているかもしれないですが、先日ご門徒さんの所で法事をしたときの話です。
法事のおつとめも終わり、五条袈裟を外し、黒衣を解いて白衣姿になったとき、お参りの 4 ～ 5 歳くらいの男の子が「おじさん、お風呂入るの？」と聞いてきました。とってもほほえましいその言葉に、一同笑顔になりました。

某広報部員